2017 年 11 月 20 日発行

文明社会としての君主制国家――人文主義的君主論の系譜とヒューム政治思想

上野　大樹(社会学研究科　非常勤講師)

18世紀啓蒙のひろがりのなかにあって、フランスの「ラディカルな啓蒙」（ジョナサン・イズラエル）とは対照的にしばしば保守的啓蒙として特徴づけられるスコットランド啓蒙の「立法者の科学」は、共和主義としての公民的人文主義(civic humanism)以上に、君主に仕える顧問官たちを中心に展開された宮廷人文主義の流れのなかに位置づけることでよりよく理解できるという可能性を提示することが、本報告の大きな狙いである。こうした見取り図のなかで、本報告がとりわけ詳しく検討するのは、『道徳・政治論集』と『政治論集』で本格的に提出されたデイヴィッド・ヒュームの「文明化された君主政」という政治概念である。この概念を活用した歴史叙述が展開された『イングランド史』は、簡単に言及するものの、ここでは本格的な検討の対象とはしない。

わが国では木村俊道に代表される比較的近年の研究動向として、古典古代にかかわる人文主義的諸文献（歴史書や修辞学書）から多くを学びつつ、そうした政治思想が共和主義的主張を導かず、むしろ君主政体の新たな正当化やその統治の運営の合理化や体制内変革のための論拠を提供することもあったという点を重視する研究が散見されるようになっている。ポーコックらが、古代ギリシア・ローマに何らかの範を求める人文主義的政治思想をもっぱら共和国の理念と結びつけて「シヴィックな人文主義」として理解したのにたいし、この動向は君主国の宮廷において顧問官たちを中心に受容され再解釈された人文主義の系譜を弁別し、その展開を検討しようとするものである。留意すべきは、こうした宮廷人文主義の研究は、君主政と共和政という基本的区別を前提にしているという点である。そのうえで、古典的な人文主義の近世ヨーロッパにおける影響は、共和主義思想に限定されるものではなく、じっさいには君主主義・王党主義の政治思想にもおよんでいたと考えるのである。本報告は、こうした宮廷人文主義の政治思想・統治論にかんする研究の動向に掉さしつつ、スコットランド啓蒙の道徳哲学を理解するうえでは、シヴィックな人文主義以上に宮廷人文主義からの連続性に着目することが有益ではないかという見通しを提出する。とりわけヒュームの政体論は、古典的共和主義にたいする内在批判として提示されている点で、こうした理解の妥当性をしめすうえでの重要な素材となる。王権神授説などの絶対主義的理論と異なって、古典古代の歴史を重要な言説資源として参照しながらも、古代共和政のある種野蛮な性格と近代君主政の穏和で文明的な特質を示唆する点に、人文主義的な君主論の弁別的特徴を認めることができるからである。最後に、以上の議論を通じて、ヒューム政治思想の中心を非古典的な再構成された共和主義とみる近年の見解

の相対化を図るともに、ラディカルな啓蒙論の図式の批判的再考にも寄与することをめざす。